地域医療最前線

市立大町総合病院

○病院の概要（令和元年度実績）
病床数：199床
病床稼働率：97.6%
平均外来患者数：382人／日
紹介率：55.6%、逆紹介率：31.1%
救急車搬入患者数：1,570人
職員数：431人（令和2年4月1日現在）

市立大町総合病院
井上 善博 病院事業管理者 兼院長

―逆境を乗り越え、地域をまるごと支える―

長野県の北西部、松本平の北に位置する大町市「北アルプス『一番街』」の呼び名のとおり、その西部一帯に標高3,000m級の北アルプス山岳が連なる山間の都市だ。豊かな自然が豊富な水源を生み、多くの湖を大町ダムへ温水路「ぬるめ」などが人を育む水の町でもある。西は富山県と隣接し、黒部ダムに続く立山黒部アルペンルートの長野県側の入り口となっている。

また、20年に一度の遷宮を昨年執り行った国宝「仁科神明宮」や、神社で今も残り繁栄を祈願し神仏習合の名残が窺える「若一王子神社」などの歴史的な建造物があり、多くが県の文化財などに指定されている。

そんな大町市にある「市立大町総合病院」が今回の取材先だ。旧大町町営病院として昭和2年に開設し、そこから90年以上にわたり地域医療の北の砦として支えてきたという。誘致唯一の災害派遣医療チーム「DMAT」指定病院であり、また第二種感染症指定病院として新型コロナウイルス感染症の対応にも尽力している。今回は井上善博院長と総合診療科の金子一明内科医長、降旗いずみ看護部長、そして川上晴夫事務長からお話を伺った。

アットホームな病院

井上先生は兵庫県姫路市の出身。山が好きで信州大学医学部へ進んだことから長野県との縁がつながった。

泌尿器科の専門医として、県内の医療機関で激務をこなしながら、そろそろ腰を落と着け る地所を と検討した際、以前 した大町総合病院のアットホームな雰囲気を思い出し、戻ろうと決めたそう。周辺に泌尿器科の常勤医がいないことと、新居に近かったことも、戻る決意を後押しした。

再赴任してしばらくした頃、新修医制度の開始に伴い、地方病院から医師が減り、医療崩壊が起きた。大町総合病院も例外でなく、一時は存続が危ぶまれる事態となったが、地域住民による支援や、信州大学の総合診療科の協力病院として医師の派遣を受けるなどしながら、徐々に活気を取り戻してきた。現在、井上先生は院長と病院事業管理者を兼ねる立場で進め、平成30年度から単年度経常収支で黒字となっている。

急性期から在宅まで

泌尿器科の医師として、主に急性期医療に携わっていた井上先生だが、経営にも携わるようになり、この病院の方向性を考えるうちに「ここは急性期のためやっていく病院ではない」と感じたそうだ。無事に手術が終わって患者さんが自宅に戻っても、元通りの生活に戻れるとは限らない。患者さんの要望に応え、かつ今ある医療資源を有効に活用するためには、急性期から回復期、慢性期そして在宅医療へと、シームレスな医療の提供に力を入れるべきだと考え始めた。

高度医療は大学病院に担ってもらい、大町総合病院では二次救急医療から在宅医療までの全てを担う。特に在宅医療に力を入れはじめ、訪問診療件数は大幅に増加、在宅死率も平成26年の8.1%から約2年で19.1%の改善と2倍以上に増えた。病院経営の改善と、地域にとってという病院であるべきかという、二つの課題を同時期に抱え、悩みながら見出した方向性だ。

そして、急性期から在宅までをまるごと診る医療体制を支えるのが、金子先生の在籍する総合診療科だ。

専門科が力を発揮できる環境づくり

総合診療科の金子先生は群馬県の出身で、もともと医師不足地域での医療に従事したいと考えていたそうだ。地方の医療環境においては、高齢者が多くて専門医が集まりにくいことなどから、一人の医師が多くを診ることが必要になる場合が多い。また、最期まで地域で過ごしたいという患者さんのニーズに応えられるよう、専門医同士をつなぐ役割も担うことに魅力を感じ、総合診療科を専攻したという。

金子先生の座右の銘は「すべては地域のために」

この病院の総合診療科は、専門科の隙間を縫う仕事を担っている。金子先生は語る。専門科の対応が難しい時は総合診療科で診たり、多疾患併存で何科にかかったらいいかわからない患者さんの二次対応などを行う。幅広く、かつ正確な知識が求められる。一方で、専門科との細かな連携が必要になることもあるため、適切な介入や引継ぎタイミングの調整にはいまだ苦労されているそう。

「病院診療は専門科があってこそ。私たちは、専門医の先生方のその専門知識を存分に生かせるよう、支えることが仕事だと思っています」と金子先生。人手の足りない地域医療の現場では、当直や病棟管理など多岐にわたる仕事を医師が担うことになりがちだ。

病院ではそうした部分を総合診療科が分担することで、専門医が自分の専門領域を深める環境を整えている。「専門医の先生方にはぜひ当院に来て、専門的な知識を存分に発揮していただきたい」と明朗に語った。

人を呼びこみ、人を育てる

病院では人材育成研修を今年から開始した。これは病院スタッフを幅広く補等のクラスに分けて、それぞれに経営の在り方等の研修を行うものだ。若い人材にもさまざまな知識をつけてもらいたい。それら病院を担っていってほしいと井上先生は考えている。「ドクターだけでなく、看護師やスタッフなど全員が対象。特に看護師は、病院を長く

病院外観

市民バスのバス停には、市ゆるキャラのおおまぴょんん

患者搬送用新型救急車両も配備されている

左から 降旗いずみ 看護部長、井上 善博 院長、金子 一明 内科医長、川上 晴夫 事務長

広々とした清潔な総合受付エリア

今あるリソースを活用する

総合診療科は、病院は医療中心のカンファレンスなど、病院は医療の終わりが退院と思っている感覚がある、自分たちは在宅の視点が足りないと言われて。耳が痛い。それなら早めに退院調整ができるよう多職種で関わりなかったり、在宅に拠点を置いて進めようと思った」と、退院カンファレンスを入院期間の途中にも開き、ケアマネージャー関わりのある地域の人を呼び、院内でさまざまな職種も集まって、患者と支援する関係者で、納得した退院調整をすることが地域で暮らすための要点と考えている。

「地域に出て、地域の現状や病院に望む声を聴いて、ずいぶんと教わらないと思う」と強調する降旗看護部長。退院調整と地域のニーズの吸い上げは一体的に進めていきたいと語った。

院内には託児所があるためスタッフも安心して働ける

地域を守り、地域が育てる病院

過去に新研修医現度により医師の確保が難しくなっていった時代、大町総合病院は地域になくてはならない病院であり、当時はまだ町病院を守る会」が発足、これに支えられ、病院も気を出そうと翌年に第二回病院祭を開催することで、より地域に密着した病院としての立ち位置を固めることになったという。

現在も、庭の花壇の手入れや病院スタッフとのイベントの企画など、さまざまな面で協力してもらっている。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となったイベントも多いと残念がる川上事務長。

大北地域には、この病院以北は糸川市まで入院できる病院施設がないという。地域で必要とされ、地域住民に支えられているかぎこえ、地域密着型病院として一層地域に目を向ける姿勢が、スタッフの中にも自然と育まれるのだろう。

趣味や家庭の時間も大切にする

また、金子先生の趣味はアウトドア。スパスポイントや、家族とキャンプをする時間を大切にしているという。病院ではチーム制を徹底しているので、定期的な休日や休みなども取りやすく、趣味や勉強、家庭の時間をきちんと持てるのだと話した。降旗看護部長もテニスをはじめとした様々の趣味を持ち、忙しい中でも趣味の時間は確保するようにしているそうだ。

しっかり休暇を取ってリフレッシュすることで、一層診療に専念できるサイクルができているようだ。スタッフ間で共通の趣味があることも、病院に流れるアットホームな雰囲気の一因だろうか。

地域を支える医療の最後の砦として、最期まで地域で暮らしたいと願う患者さんのため、妥協せず提供できるリソースを探求し続ける一方で、継続して支援するために次世代の育成や医療者の負荷を少しでも減らす工夫を惜しまない。これからも課題はあろうが、逆境をはねのけて人を呼び込む、大町総合病院ならではの魅力を発信しつづけてほしい。

病院と地域一帯を見守るアルプスの峰々

職能を発揮する範囲がその病棟に限定されてしまうことがあったが、リソースナースセンターが配置されたことで、病棟の垣根を越えて、必要な場面にすぐ発信・介入できるように心がけている。また、認定看護師による教育や多職種の連携調整ロールモデルとしての実践や、認定看護師が集まる場ができることで互いの相談も行いやすくなったという。

口ぐちは「ピンチはチャンス」逆境も楽しんでしまうという

特に、緩和ケア認知症看護の認定看護師は積極的に地域に出る機会が増えたそうだ。緩和ケア認定看護師の例として、大町総合病院には訪問看護ステーションがあるが、終末期の急まま自宅に帰ることが決まった患者さんに対し、急を要する場合は入院中に面識のある認定看護師が代わって訪問看護ステーションへ移行するなどの工夫が流れた。疼痛管理など気を遣うケアに通じては、信頼関係を築いてきたためだという。また、病棟が看護部所属に所属することで、サポート体制を築くことで今あるリソースを活用する姿勢は、総合診療科に限らず病院全体に通じる風潮ではないか。降旗看護部長の話を伺ってそう感じた。

看護部では今年から体制を組み換え、リソースナースセンターを設置した。これは今まで病棟配属だった認定看護師所属でなく、看護部長直轄の組織だ。従来は病棟業務に追われたり、病棟を見守っているのは地域住民だけではない。越大北アルプスを背にいただく大町総合病院では、医師やスタッフに山好きの人も多いという。井上先生は登山が趣味で、学生時代にワンダーフォーゲル部に所属、白馬岳から17日かけて山々を巡ったこともあるそうだ。山好きが高じて長野に家を建てたが、「山に近すぎて、自宅からは頂が見えない」と苦笑いで語ってくれた。

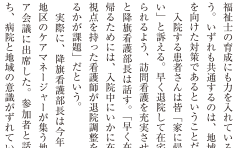
のびのびと過ごせるよう、ラウンジには畳のスペースも

地域の視点を大切にしたい

看護部体制を組み換えた際、地域のニーズを吸い上げつつ看護部取り組みを発信していくことを目的に、地域連携室に看護部長を一人配置した。また、地域の高齢の現状を受け、高齢者認知症対策に力を発揮できる介護福祉士の育成にもチャレンジを入れているという。いずれも共通するのは、地域に目を向けた対策であるということだ。

入院する患者さんは皆「家に帰りたい」と訴える。早く退院して在宅で看護と降旗看護部長は話す。「早く在宅に帰るためには、入院中にいかに在宅の視点を持った看護師が退院調整をできるかが課題」だという。

実際に、降旗看護部長は今年8月、地区のケアマネージャーが集う地域ケア会議に出席した。参加者と話すうち、病院と地域の意識がずれていることを改めて感じたという。「医療者中心のカンファレンスなど、病院は医療の終わりが退院と思っている感覚がある、自分たちは在宅の視点が足りないと言われて。耳が痛い。それなら早めに退院調整ができるよう多職種で関わりなかったり、在宅に拠点を置いて進めようと思った」と、退院カンファレンスを入院期間の途中にも開き、ケアマネージャー関わりのある地域の人を呼び、院内でさまざまな職種も集まって、患者と支援する関係者で、納得した退院調整をすることが地域で暮らすための要点と考えている。



外気の入る明るいレストランは誰でも利用可能